

キリンはどこからやってきた？ ～飼育係は生きものと向き合う専門家～

公益財団法人 横浜市緑の協会 野毛山動物園 落合 絵美

はじめに

横浜市にある3つの動物園（野毛山動物園、よこはま動物園ズーラシア、金沢動物園）には、現在68名の学芸員が在籍している（2019年3月末）。博物館では学芸員が専門的職員として配置され、資料の収集・整理、保管・保存、展示・活用、教育普及、調査研究を行っているが、動物園では飼育展示係に配属された職員が同様の業務を担っている。今回は資料収集がテーマであることから、当園で現在飼育している2頭のキリンの事例を紹介する。

動物園の資料収集の現状と方法

動物園が扱う資料は生きた動物である。そのため、その動物の寿命を超えて展示し続けることはできず、絶えず収集し続けることが必要となる。

しかしながら、野生動物の個体数減少や感染症の蔓延防止のための法的規制が強化されている。さらに、動物福祉の観点から、野生動物を飼育する場合、国際的な飼育管理基準が定められるようになり、海外の動物園水族館から動物を導入するには、この基準を満たすことが求められるため、将来に向けて動物の収集は困難になりつつある。そこで、国内外の各動物園と協力し、現在飼育している動物たちの累代繁殖が急務となっている。

動物の収集においては、展示計画や繁殖計画に基づき、性別や年齢、血統が収集の目的や条件に合うことを前提に、国内外の関連法に抵触・違反しないことや種の保存について十分に配慮すること、そして、できるだけ飼育下で繁殖した動物とすることが求められる。主な収集方法としては、①繁殖、②貸し借り・ブリーディングローン、③交換、④譲受・寄贈、⑤購入、⑥採集、⑦保護などがあり、ブリーディングローンとは繁殖を目的に行う動物の貸し借りのことである。

当園でのキリン収集について

キリンは、野生での個体数が10万頭以下まで減少し、2016年に国際自然保護連合（IUCN）の絶滅のおそれのある種のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。また、日本国内の動物園での飼育頭数も減少傾向にあり、今後も動物園でキリンを展示していくためにも、各動物園での繁殖が期待される。

当園では「そら（雄）」、「モミジ（雌）」の計2頭（2019年3月末）を飼育しており、それぞれ「繁殖」と「ブリーディングローン」によって収集を行った。

(1) 繁殖の事例

「そら」は2012年2月7日に誕生したが、母親の母乳がでなかったため、人工哺育となった。人工哺育ではペットボトルを哺乳瓶として使用し、牛用の初乳や代用乳を与えた。なお、人工哺育は生後447日齢まで実施した。



図1 哺乳瓶からミルクを飲む「そら」

また、キリンは誕生後1時間程度で立ち上がるが、「そら」は自力で立ち上がることができなかったため、飼育員による起立補助が行われた。



図2 起立補助の様子



図3 飼育員に支えられて立つ「そら」

後肢が横に開く症状が見られたため、必要以上に開かないように処置を行うことで、自力で起立や歩行ができるようになった。その後、生後34日齢で初放飼となった際は展示場を走り回る様子が見られた。また、人工哺育開始直後から親とは分けて飼育していたが、同居馴致を行い、生後62日齢で親と同居展示を開始した。(長倉、2012)



図4 初放飼の様子



図5 同居展示の様子

(2) ブリーディングローンの事例

2014年までに当園の飼育個体が「そら」1頭となった。キリンは雌雄ともに3歳から4歳で性成熟を迎える。「そら」が性成熟を迎える年齢になった2016年、当園の展示・繁殖計画に基づき、埼玉県子ども動物自然公園（埼玉県東松山市）とブリーディングローンを結んだ。対象個体は2014年10月14日に生まれた「モミジ」で、搬入当時2歳、体高約300cm、推定体重約480kgだった。

搬入は2016年11月7日休園日に行った。輸送トラックは10時頃に埼玉県子ども動物自然公園を出発し、当園には13時頃に到着した。輸送箱を積んだトラックは動物園正面入口から入り、キリン大展示場に入った。



図6 入園口から入るトラック

輸送箱は、獣舎の構造により収容する寝室の入口に直接設置することができなかつたため、獣舎入口にラフターを使い、輸送箱を下ろした。輸送箱の扉を開放し、寝室までの通路（約850cm）を歩かせて寝室に収容した。扉開放から約23分で寝室に収容することができた。



図7 輸送箱を設置している様子

収容後は興奮するような様子はなく、すぐに採食が見られた。搬入後1週間の検疫中に寝室間の移動などの馴致は順調だった。



図8 寝室に収容直後の様子

検疫終了後、展示場への馴致を開始した。「モミジ」1頭で展示場に出すと落ち着かない様子が見られ、獣舎入口付近にとどまることが多かった。そのため、「そら」も展示場に出し、「モミジ」を隣の展示場に出すこととした。すると、落ち着いて採食する様子が見られ、行動範囲も広がった。展示場への馴致を1か月ほど行い、12月に展示開始となった。



図9 展示場馴致の様子

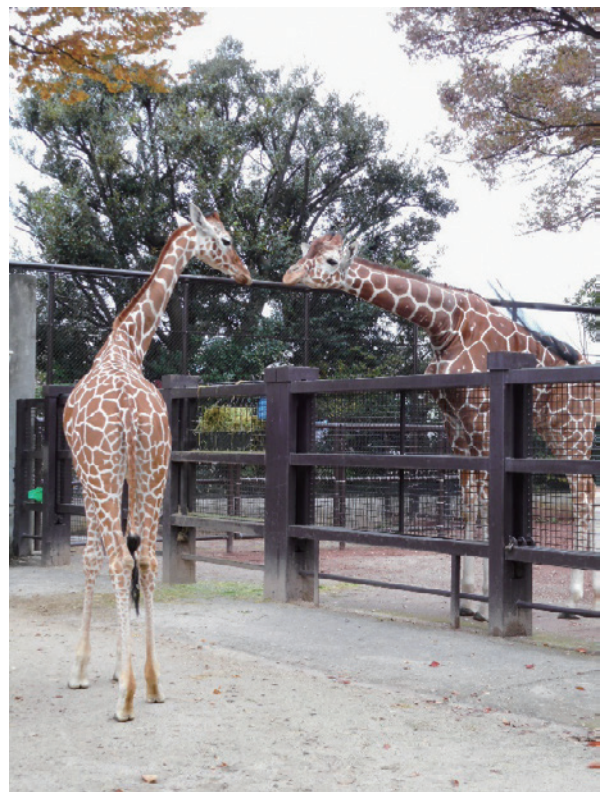


図10 2頭での展示馴致の様子

現在、2頭は繁殖を目指し、同居展示を行っている。「モミジ」も性成熟を迎える年齢になり、3歳で春機発動（初めての発情）が確認され、その後も定期的な発情も確認されており、近い将来に繁殖することが期待される。

まとめ

今回は資料収集がテーマであったことから、キリンの「繁殖」と「ブリーディングローン」によって収集した個体の事例を紹介した。動物園が扱う資料は命ある動物であり、学芸員でもある飼育展示係は、動物をただ飼育・展示するだけでは

なく、動物の福祉にも配慮し、動物本来の姿やその生態を来園者に伝えていく必要がある。さらに繁殖や調査研究などを通し、その動物の保全にも携わっていくことが重要である。

参考文献

長倉かすみ・菊池博 2012 アミメキリン人工哺育個体成育初期における各種疾患への対処例
横浜市立野毛山動物園 第145回 日本動物園水族館協会 関東・東北ブロック動物園技術者研究会資料：13